

ぼくは障がいを持って生まれた





ぼくは今、24歳だ。

脳に重い障がいを持って生まれた。

そんなこと知らなかったし、今も分からない。

ぼくに、どれだけ記憶があるのかも分からない。

これからどう過ごせばいいのか、それも分からない。

「ない、ない」ばかりだ。

でも、ぼくのような人たちのことを、
みんなが少しでも理解してくれるなら、
少しだけ、ぼくのことを話してみたい。

1歳児検診の時、精密検査を受けるように言われた。

大学病院で調べたら、重度の知的障が이었다。

両親はただ、とまどっていた。

両親に甘えたくても、言葉が出ない。

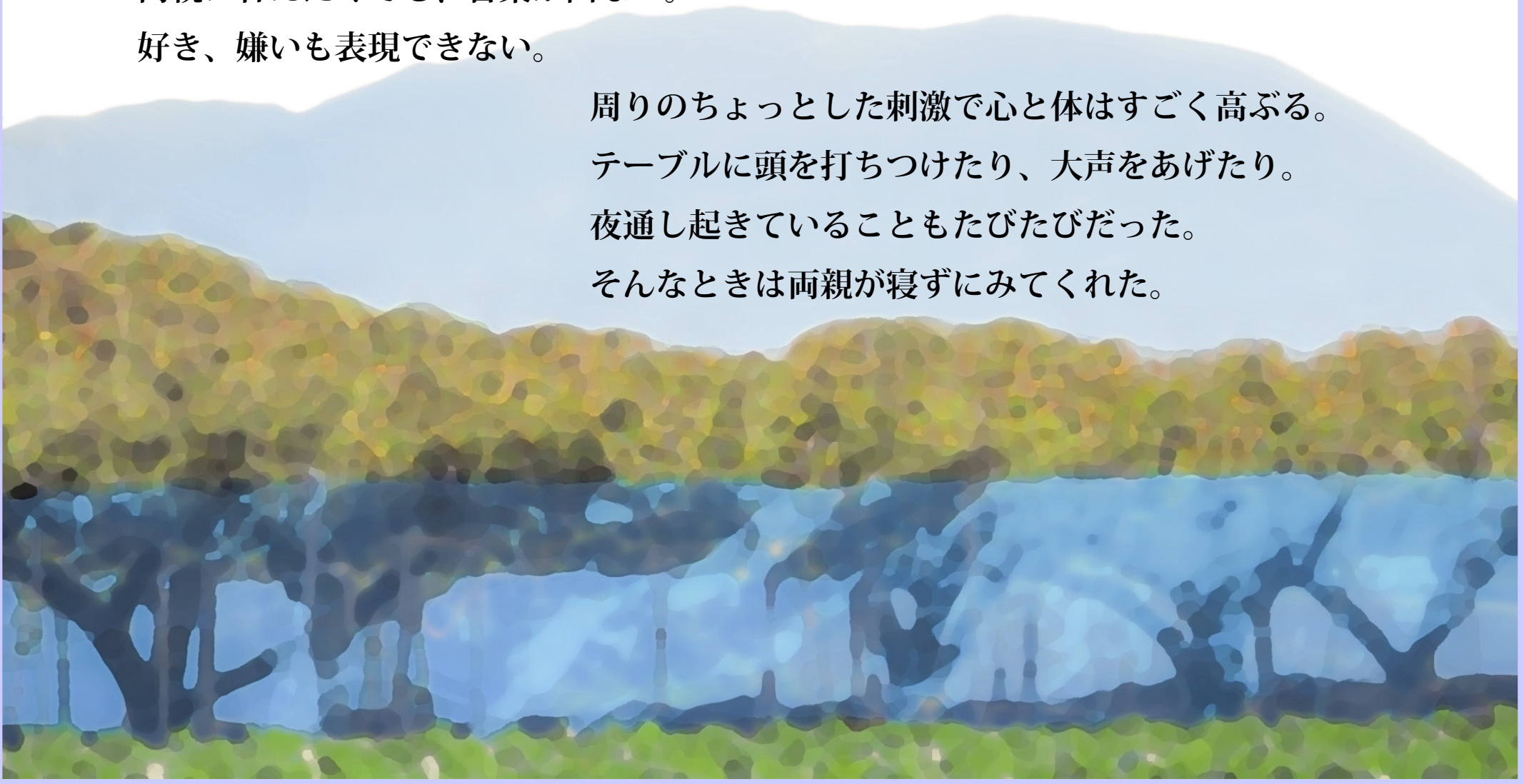
好き、嫌いも表現できない。

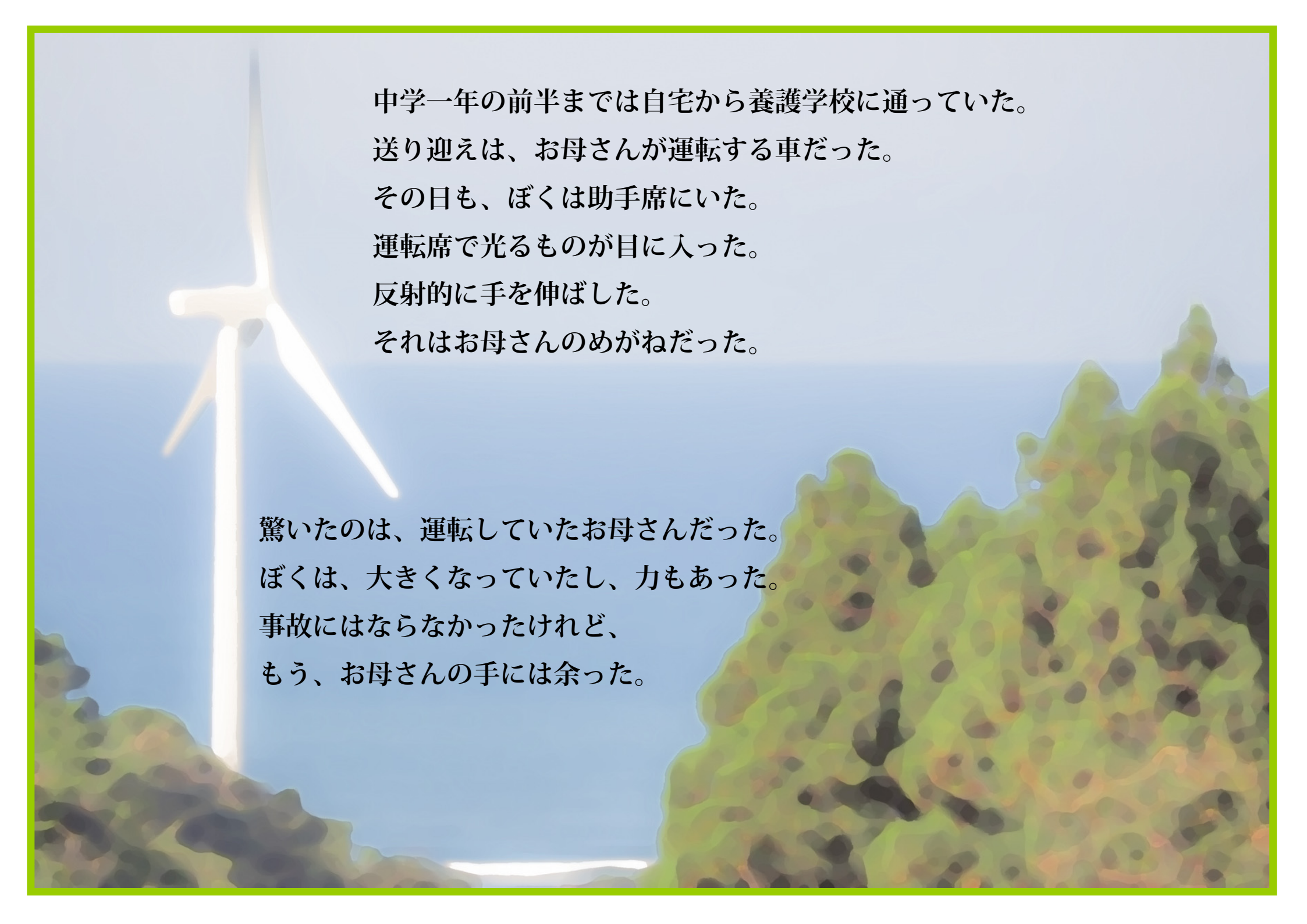
周りのちょっとした刺激で心と体はすごく高ぶる。

テーブルに頭を打ちつけたり、大声をあげたり。

夜通し起きていることもたびたびだった。

そんなときは両親が寝ずにみてくれた。





中学一年の前半までは自宅から養護学校に通っていた。
送り迎えは、お母さんが運転する車だった。
その日も、ぼくは助手席にいた。
運転席で光るものが目に入った。
反射的に手を伸ばした。
それはお母さんのめがねだった。

驚いたのは、運転していたお母さんだった。
ぼくは、大きくなっていたし、力もあった。
事故にはならなかったけれど、
もう、お母さんの手には余った。

それから郊外の静かな施設に入って過ごした。
しばらくは慣れなくて困った。
施設には、ぼくのような悩みを持つ人たちがいて、
ひとりで生活ができるように学んでいた。



ときどきは、みんなと出かけて外の世界にも触れた。
ぼくも少しは成長した、そう思ったけれど、
やっぱり、わずかな刺激に心と体は混乱してしまう。
迷惑をかけるつもりはないのに。
施設は、ぼくを20歳まで受け入れてくれた。

ところで、お父さんと、お母さんが言うには、
ぼくは、食べるのが好きらしい。
なかでも、から揚げとウインナーが好物のようだ。
ぼくが気持ちを表現できないから、
「らしい」「ようだ」としか言えない。



素直に感情を出すことはむずかしいと思っていた。
好きな食べ物が分かっただけでも、うれしい。
介助なしで食べられると、もっといいのだけれど。

ぼくたちの中には、絵の才能を持った人もいる。
ぼくにもあれば、違った世界が開けたかもしれない。

言葉を話せたら。
気持ちをそのまま表現できたら。

ぼくは、食事をするときも、服を着るときも、
トイレに行くときも、人の手を借りないとできない。
もうちょっと、自分の手で自分のことができれば。



ぼくは今も家族と離れ、別の施設で暮らしている。

週末は帰って、お父さん、お母さんと過ごす。

「ない、ない」ばかりの人生を歩んできた。

でも一つ言えるのは、生きているということだ。

たぶん一生懸命に。

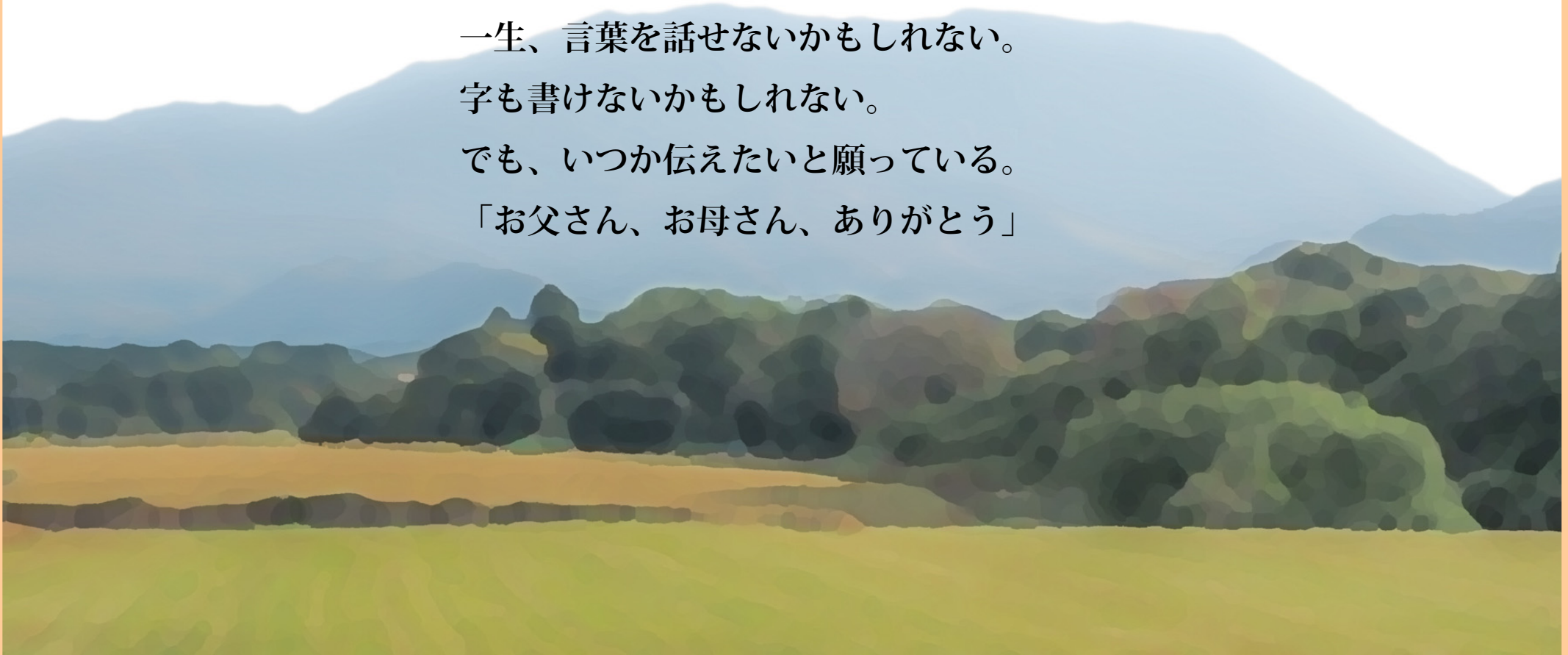
ぼくがいて、お父さん、お母さんがいる。

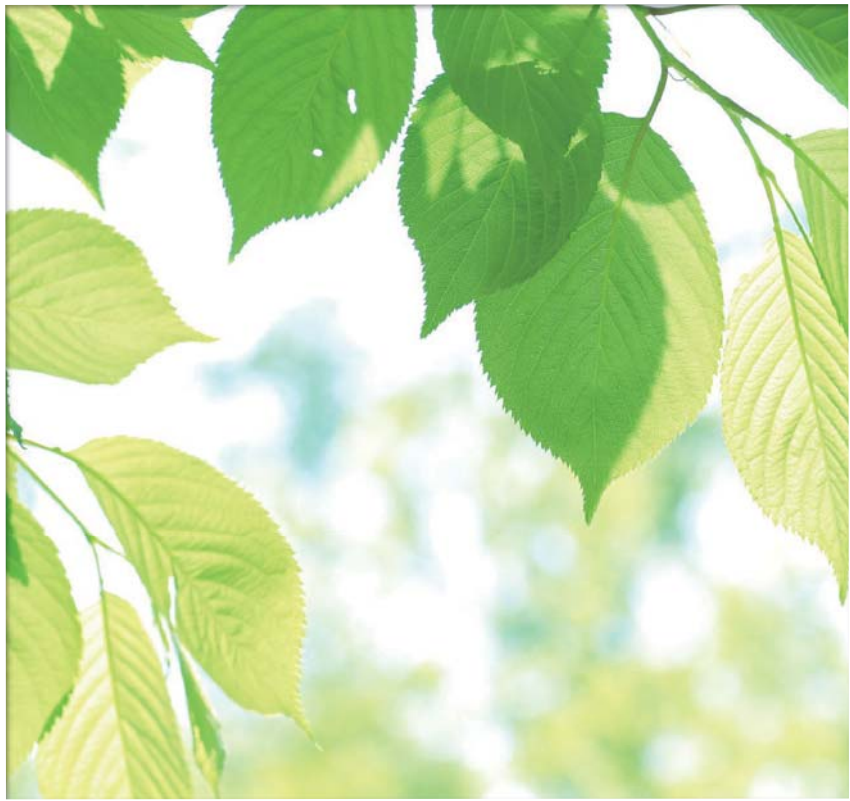
一生、言葉を話せないかもしれない。

字も書けないかもしれない。

でも、いつか伝えたいと願っている。

「お父さん、お母さん、ありがとう」





「知的障がい」について

発達期になんらかの原因で知的な能力が年齢相応に発達していない状態、および社会生活への適応に困難があります。「言葉を使う」「記憶する」「人とのやりとり」に少し時間を要します。周囲の理解や支援で一步一步成長できる可能性を持っています。

★こんな配慮がうれしい！

- ◇ゆっくり簡単な言葉で話しかける
- ◇危険なシーンを目の当たりにしたらやさしく声をかける
- ◇パニック行動が起きたときは、落ち着ける場所へ誘導
- ◇誤解されやすい行動をする場合があるので、
思い込みで判断せず見守る

あしがき

お父さんとの1時間ほどの取材でした。
「親としては、ただ穏やかに過ごしてくれたらと願うだけです」。
返す言葉も見つかりませんでした。
息子さんがどんな思いで過ごされてきたのか。
大山や日本海が望め、木々や畑に囲まれた自宅。

その風景の中に立ち、思いを巡らせました。
意思表示するすべを知らない彼ですが、生まれ育った景色は目に焼き付いていると思いました。(か)